

論文

劉賓雁の天津における革命活動について —耀華中学での活動を中心に—

About a Liu-Bin yan's Revolutionary Activities in Tianjin
—Mainly discussing Activities in Yaohua Junior High School—

後藤 岩奈¹
GOTO Iwana

1 はじめに

筆者は1990年9月から1993年7月まで、中国天津市の南開大学に留学した。この留学中、天津社会科学歴史研究所編集出版の『天津歴史資料』第7期の複写の提供を受けた²。その際、資料の一つに、「人妖の間」、「第二の忠誠」などの報告文学で知られ、また中国の民主化運動に影響を与えた報告文学作家の劉賓雁（1925～2005）が、抗日戦争末期、天津において中国共産党の地下組織の活動を行っていた際の状況を記述したものが含まれていることに気づいた。この資料は、王左、呉空、李平、楊金鏞、宋謙、吉達、鄒徳文、李郁蓀「解放戦争時期耀華学校的学生運動」、天津社会科学歴史研究所・編集出版『天津歴史資料』第7期（1980年11月）である（以下、「耀華学校」と略記する）。

この論文は、抗日戦争末期の1945年から49年新中国成立までのいわゆる国共内戦期に、天津市の耀華中学において展開された中国共産党の指導による学生運動の発展の過程を、当時同中学の学生であり、運動参加の経験をもつ卒業生らがまとめたものである。このうち、第一節にあたる「耕耘播種扎根群衆」の中で、劉賓雁が党の工作の一環として、同中学に教員として赴任した際の状況が述べられている。

劉賓雁の耀華中学での活動については、李怡「劉賓雁和他的時代」（『70年代』1982年12月。邦訳・齊辛著、伊藤正監修、六木純訳、『風にそよぐ中国知識人』所収、文藝春秋、1983年10月。以下「他的時代」と略記する）、劉賓雁著『劉賓雁自伝』（香港・新光出版社、1990年。邦訳・鈴木博訳『劉賓雁自伝』、みすず書房、1991年8月。以下『自伝』と略記する）でも触れられているが、この二つの資料は劉賓雁本人によって述べられたものであるのに対し、「耀華学校」は当時の学生の側からの記述であり、分量的には1300字程度で多くはないが、劉賓雁という人物の思想と行動に関心をもつ者にとって興味深く思われる。

本稿は第2、4章において彼の天津滞在時期の行動を整理し、第3章においてこの「耀華学校」中の劉賓雁に関する記述部分を翻訳、紹介し、その後の彼の文学活動との関連について考察を加えるものである³。

2 耀華中学に赴任するまでの過程

まず、劉賓雁の天津での足どりを追ってみる。劉賓雁が天津に滞在した期間は1943年3月から

1946年7月までの2年10カ月、年齢的には18歳から21歳までの時期である⁴。

1939年、劉賓雁は故郷ハルピンで中学に進学するが、当時ハルピンは既に日本の統治下にあり、中学校では日本式の軍国主義教育が行われていた。これに反感を抱いた劉賓雁は、1940年、より多くの知識を得るために、姉の劉放を頼りに北京へ行き、姉夫婦から学費の援助を受けながら中学にかよう。しかし姉は経済的理由から援助を続けることができなくなり、劉賓雁は中学を中退せざるを得なくなる。このため彼は、解放区へ行き共産党の指導する抗日運動に参加することを希望する。1943年9月、劉賓雁は友人と共に天津へ行き、解放区に連れて行ってくれる人物を得る。しかし天津の共産党系団体は地下抗日闘争に参加する人材を必要としており、劉賓雁はこれに応じて天津に留まり、抗日運動に参加することになる。

彼は小学、中学の教員、銀行職員などの仕事をしながら、「天津市各界抗日救国聯合会」（略称「抗聯」）の会員となり抗日運動を行った⁵。また、同会会員楊昌炎の自宅に住み込み、ここを生活の拠点とした⁶。主な活動内容は、天津市内での抗日宣伝ビラの配布であった。特に劉賓雁は日本語に堪能であったので、独自に日本語の反戦ビラを作成し、日本人居留民宅にも配布している。また同志の獲得、革命思想の宣伝普及を目的として読書会を組織し、進歩的な文学、政治書、あるいは解放区から送られてくる文献や毛沢東の著作をテキストとして学習会を行う。

1944年には、「抗聯」の同志と共に太行山脈東麓、晋察冀抗日根拠地内の中共中央晋察冀分局都市工作部へ工作任務を受けに行き、ここで入党申請が認められ共産党員となる⁷。その後、天津に戻った彼は、市内の耀華中学において党の工作を行うことになり、1945年3月、地理の教員として同校に赴任した⁸。授業は週に2次限、対象は男子部6学年12クラスであった。

3 耀華中学の教員として

以下、「耀華学校」より関係部分を訳出する⁹。

学生たちが暗黒の中で模索し、前途の見通しがたたないと感じていた時、1945年のはじめ、新学期の開始とともに、耀華学校に若い地理の教員劉子安がやって来た。彼は見たところ20歳を越したばかり、といった様子で、身体全体に青春の活力がみなぎっており、両眼には機智に富んだ輝きをたたえていた。かれの態度は気さくで親しみ易く、いかめしい気位といったものはなく、授業が始まると、学生たちはすぐにとっても良い印象を受けた。彼は学生たちに、むやみに書物にかじりつくようなことは要求せず、皆が視野を広げ、多く社会に学ぶよう指導した。最初の授業で彼は学生たちに言った。「地理の知識というものは、各人の故郷にたくさんの生きた教材があり、それは書物からは得ることができないものです。この授業では、皆さんが各自の故郷の状況を話してくれて結構です。」教室の中はしばらく静まりかえった。その後、後ろの列の座席から、幾分垢ぬけない感じのする学生が立ちあがった。彼は黒い布の服を着ており、ぶ厚い黒縁メガネの下には、その大きな顔に常に誠実そうな笑みをたたえていた。彼も今学期になって新しく来た学友であった。「私の名前は劉未といいます。河北省文安県の出身です。」彼はこう言うと、引き続き、自分の故郷では毎年のように災害が起こり、人々が住む家を失い、路頭に迷うその惨状を語った。そのあと彼は言った。「このため、私たちの地方には“水は文安の窪地を覆い、十年家に戻れない”という諺があります」。この話は素朴で、上品なものではなかったが、これまでずっと天津の「租界」の中で生活してきた学生たちは、この話を聞き、その視野を広げることになった。（中略）

もともと劉未（康力）と劉子安はいずれも中国共産党の党員で、新たに党の工作を始めるために

天津の党地下組織より耀華学校に派遣されたのである。

劉子安は耀華学校に来てからのち、しばしば教壇上で学生たちに第二次大戦の情勢を分析してみせ、また多くの具体的で生き生きした材料を使って学生たちの愛国主義思想を啓発した。授業以外の時間には、学生たちは望んで彼の宿舎を訪れ、ある者は様々な問題について彼に教を乞い、またある者は自分の胸中の悩みを打ち明けた。劉子安は熱心に彼らを受け入れ、誠意をもって彼らと語り合った。彼の指導のもとで多くの学生が日本帝国主義は必ずや中国から駆逐されるだろうこと、中華民族は偉大な民族であり、輝く前途があることを認識したのみならず、八年来、真に抗日を展開してきたのは中国共産党であり、中国共産党こそが中華民族の希望であることを認識したのである。当時、高2クラス(46期)に金永清という学生がいた。彼は深い民族の怨念を抱いており、かつて「大後方」へ行って抗戦に参加しようとしたことがあった。彼は劉子安にみずからの心情を語った。「重慶に行くことだけが抗戦だと思いませんか。」劉子安は彼に問い返すと、手にまかせて『晋察冀画報』を一冊取り出し彼に見せた。画報の表紙は、城壁につるされた一個の血の滴る人頭の写真であったが、これは敵の後方で戦闘に参加し、祖国の解放のためにみずからの生命を献げた共産党員のものであった。この写真と向かい合うと、金永清の目は一瞬光を放った。これを契機に彼はひたすら思索を重ねた。劉子安の忍耐強い助言教育のもとで金永清の意識は絶えず向上し、日本降伏の前夜、とうとう彼は耀華学校における新たな共産党員の最初の一人となった。

抗日戦争勝利後、天津地下党は耀華学校での工作を強化するために、さらに共産党員徐景春を当校へ派遣した。1945年9月11日、良く晴れわたった日曜日、上部党組織の指示により、劉未、劉子安、徐景春、金永清の四人の同志は、学校図書館の脇にある劉子安の宿舎において秘密裡に第一回全体党员会議を開き、これによって耀華学校地下党支部が結成され、劉未が支部書記を担当することになった。さらにこの会議では抗日戦争勝利後の新たな情勢のもとでの工作任務が検討され、広範な教員学生が抗日戦争勝利を喜び祝うこの機会を充分に利用し、様々な形式によって宣伝教育活動を展開し、大衆を組織することが決定された。……

以上、「耀華学校」2～3頁より関係の箇所を訳出した。

4 抗日戦争勝利以後、天津を離れるまで

1945年8月の日本降伏の後、10月には国民党天津市政府が成立する。それ以降天津は国民党の統制下におかれることになる。

「耀華学校」によると、この時期、劉賓雁が参加した運動は、学生有志による抗日劇上演の際の演劇指導、10月の魯迅逝去9周年の記念活動、12月の反甄審運動、1946年1月の昆明12・1虐殺に対する抗議行動、共産党員曾常寧の父親曾延毅に対する教育工作などである。以下、それぞれの活動について見てゆく。

学生有志による抗日劇上演の際の演劇指導について¹⁰。抗日戦争勝利の直後、高1、2クラス(48、47期)の学生の間で自主的に抗日劇を上演する運動が起こった。地下党支部はこれを支援し、劉賓雁が一幕劇「張家店」を選び、演技指導を行った。この劇はのちに婦女連誼会の抗日祝賀会に招かれて上演され、観客は400名に達した。また耀華中学全校行事として抗日祝賀会が開催された際にも、地下党支部の支援のもと、48、47期生が劇「布袋隊」、「漢奸の子孫」を上演したが、いずれも劉賓雁が監督を担当している。

10月の魯迅逝去9周年の記念活動について¹¹。1945年10月19日、地下党支部は一学生宅で魯迅逝

去9周年の記念活動を行う。会上、劉賓雁が魯迅の文学活動に関する講演を行う。この会を契機に、参加者は学生劉保端宅に書籍を持ち寄り「魯迅図書館」を設立、さらに翌46年2月8日には20数名の学生によって読書会「未名」が結成される。この会は、国民党の学生運動弾圧が強化される同年6月まで活動を続けた。

12月の反甄審運動について¹²。1945年9月25日、国民党政府は「回復区における中学以上の学生を甄別審査する方法」（「甄審収復中学以上学生之辦法」）を公布する。これは、国民党統治区の中学以上の教員学生に対して試験による甄別審査を行い、不合格者のうち、教員は不採用、学生は学籍を認めない、とするものであった。これに対し教員学生は反甄別闘争を展開する。12月26日、学生は「天津市学生聯合会」を結成、甄別審査の取り消しを要求して抗議行動を行う。同31日、教育部は「学聯」の要求を呑んで甄別審査の撤回を発表する。

1946年1月の昆明12・1虐殺に対する抗議行動について¹³。1945年12月1日、昆明の西南聯合大学の教員学生が内戦反対、民主連合政府樹立を主張して集会を開催したところ、国民党政府軍がこれを鎮圧、教員学生4名が死亡、60余名が重傷を負った。46年1月、「天津市学聯」は犠牲者追悼活動を組織し、25日、学生200余名の参加で虐殺抗議、内戦反対、平和強化の集会とデモ行進が行われた。劉賓雁によると、この抗議行動では耀華中学からの参加者が最も多かったという。

共産党員曾常寧の父親曾延毅に対する教育工作について¹⁴。曾延毅は元軍人の愛国人士で、解放後、天津市政治協商会議の委員を務めた。保定軍官学校の出身で、在学中溥作義と同期生であったため、退役後も国民党軍内に一定の人脈をもっていた。劉賓雁が運動への協力を求めて曾と接触し、その結果、曾の自宅を活動拠点の一つとすることに成功する。

劉賓雁は耀華中学におけるこれらの党の工作によって、共産党員というその素性を学校当局に知られることになる。また国民党三民主義青年団の学生が劉賓雁を監視し、その動向を天津市警備司令部に逐一報告しており、彼らはさらに劉賓雁に対して宿舍の窓ガラスを割る、武器をちらつかせるなどの威嚇行為を公然と行うようになる。

1946年6月、国民党は学生運動の弾圧を開始、学生団体の活動を禁止し、7月に入り各学校の主要な運動家を逮捕、除籍処分とした。これに対し、中共天津市委員会は緊急通知を出し、組織保全のため主要運動家の解放区への撤退を指令した。耀華中学地下党支部では、天津市委の指示に従い、特に厳しい監視を受けていた劉賓雁ら6名の党員が耀華中学を離れることになった。同月、劉賓雁は党籍を天津に残したままハルビンへと移動した¹⁵。

5 おわりに

この「耀華学校」から何が見られるであろうか。

劉賓雁が反官僚主義の作品を発表するのは新中国成立後の1956年からであり、その作風は、直接にはスターリン死後、「雪どけ」期のソビエト文学の影響を受けている。また作品の題材は、当時「中国青年報」の記者として中国各地あるいは新聞社内で見聞、体験した事実に依っている。このため、この「耀華学校」の記述の中には、題材の選択、作品の構成など方法論の面で彼の創作に直接つながるものはまだ見られない。しかし、それでもなお彼の文学活動との関連で見落とせない点が含まれていると思われるので、いかに挙げてみる。

まず、劉賓雁が耀華中学において行った授業の意味について見てみる。劉賓雁は中学の教壇に立ち、学生に向かって、現実に身のまわりに存在し、直接自身と関係のある事象、例えば各学生の故郷の生活状況や第二次大戦の戦況などを教材として、学生一人一人に問題意識や興味を持たせ、そ

これらの事象と学生自身がどうかかわり合っており、またこれからどうかかわってゆくのかを考えさせ、学生の自発性を引き出そうとする。

当時、劉賓雁は教員の身分で同中学に赴任していたが、本質的には彼は抗日民族解放の革命運動を組織する党の工作者であるので、現実から離れた知識よりも、より現実的、より切実な問題から論を展開してゆくことは、大衆（ここでは学生）を現実の闘争に向けて組織する運動家としては、ごく当然なことであると言えよう。

次に50年代に発表された劉賓雁の二篇の作品について見てみる。黄河鉄橋の橋梁工事現場を舞台に、労働者の生活や工事現場の実状を考慮して工事計画をたて、能率をあげ現場を活性化させようとする若い技師が、かつての情熱を失い、上級の指示に従うことのみで専念する幹部らによって排斥されてゆく状況を描いた「橋梁工事現場にて」（「在橋梁工地上」）、新聞社を舞台に、記者が自身の問題意識から取材、執筆した記事が、すべての権限を掌握する編集長一人の恣意的判断によって内部ニュースとしてのみ処理されてしまう新聞社内の官僚主義体質を描いた「本紙内部ニュース」（「本報内部消息」）、いずれも個々の人間の才能、自発性、積極性が官僚主義のために阻害されてゆく様子が描かれ、その不条理の告発が作品の基調となっている。

ここで、劉賓雁の耀華中学における運動と50年代に書かれた作品の基調とを照らし合わせて考えてみると、劉賓雁は当時の運動の中から、個々の人間の内面を充実させ、主体性の形成を促し、また自発性、積極性を発揮させようとする部分を、いわば「一人一人の人間の解放」ともいうべき方向で継承し、それが結果として56年以降の彼の反官僚主義の文学活動に結びついていったと言えないだろうか。

また「耀華学校」には、学生たちが劉賓雁を慕って彼を宿舎に訪ね、劉賓雁は誠意をもって学生たちに接し、討論し合う、という内容の記述が見られるが、劉賓雁のこのような姿は、1980年代、身内の「平反」を求めて陳情に訪れる人々の話を熱心に聞く「人民日報」記者、報告文学作家としての劉賓雁の姿にも重なるものがあり、ここにも彼の思想の一貫性とその人柄がうかがえる。

この「耀華学校」には、民衆一人一人の内面的な充実と主体性の形成、積極性、自発性の発揮に価値を見出す劉賓雁の思想と行動の原型ともいうべきものが見られると言えよう。

注

- 1 新潟県立大学国際地域学部教授。
- 2 この文献の提供者は小林元裕氏で、当時立教大学大学院文学研究科歴史学専攻の院生で、現在は東海大学文化社会学部アジア学科教授である。ここに改めて御礼申し上げる次第です。
- 3 筆者は、1995年3月に、北九州中国言語文化研究会編『北方人』第3号に「天津・耀華中学教員としての劉賓雁について」を執筆発表した。この研究会は、北九州大学（現在の北九州市立大学）大学院外国語学研究科中国言語文化専攻の院生およびその修了生から構成される研究会であったが、現在では活動を行っておらず、存在していない。この会の発行する論集『北方人』は自主製作の同人誌で、発行部数もごく僅かであり、非売品で書店にも流通しておらず、国立国会図書館への寄贈やインターネット上での登録公開も行っておらず、現在一般に目にすることができないものである。筆者は、この論文は今日においても他の研究者が言及していない事実や観点が含まれていると考えており、諸氏の御批判を仰ぎたいと考えているが、現在、多くの人の目に触れることができない状況である。そのため、1995年執筆の「天津・耀華中学教員としての劉賓雁について」をもとにして、新たな資料を踏まえて書き改め、「劉賓雁の天津における革命活動について—耀華中学での活動を中心に—」と題して、ここに発表するものである。
- 4 2章、4章で述べる天津滞在記の劉賓雁の行動については、特に記さない限り「他的時代」、「自伝」に依った。
- 5 1939年、究真中学（現在の天津30中学）の学生によって結成された読書会を起源とする。この会員の一部が、のちに冀中抗日根拠地で共産党員の指導を受け、42年に「天津市青年抗日救国会」を結成、翌43年、「天津市各界

- 抗日救国联合会」(抗聯)と改称する。「抗聯」は青年、特に教職員、学生を主な構成員とする地下組織で、44年には内部に党組織を結成する。抗日戦争勝利時には会員は100余名に達し、そのうち党員は50～60名ほどであったという。天津社会科学院歴史研究所『天津簡史』編写組・編著『天津簡史』(天津人民出版社、1987年8月)、383～384頁。
- 6 楊昌炎の自宅は、天津市内中央を流れる海河の東岸(現在の天津市河北区)の糧店後街にあった。『自伝』23頁。
- 7 劉賓雁は『自伝』において、中共中央晋察冀分局都市工作部の所在地を阜平県西柏坡村であると述べているが、これは河北省平山県西柏坡村の誤りであろう。『自伝』25～26頁。河北省測絵局編『河北省分県図冊』(中国地図出版、1993年1月)。
劉賓雁が天津に滞在した時期に天津の抗日闘争を指導した共産党系団体は以下のとおりである。抗日戦争後期(1944～45年)、中共北方局晋察冀中央局および冀東、冀中、山東(渤海軍区)抗日根拠地の党委員会都市工作部が指導した。抗日戦争勝利後の45年8月、冀中根拠地の党委は「天津工作委員会」(「津委会」)を結成、天津市内の党地下組織の活動および天津郊外の武装闘争を指導する。国民党天津市政府成立後の46年3月、「津委会」は「中共天津市委員会」(「天津市委」)に改組、合法、公然活動を行うようになる。『天津簡史』377～378、402頁。劉賓雁の入党について、于建著『天津現代学生運動史』(天津古籍出版社、2007年)では、次のように記載されている。「1944年7月、楚雲、康力、劉克(劉賓雁)、辛冬は命令を受けて晋察冀中央分局に行き、都市工作部長劉仁および余条清に工作を報告し、ならびに新たな任務を受けた。この期間に、彼ら四人は前後して党組織に加入した。」同書216頁。
- 8 耀華中学は天津市街のほぼ中央部、現在の和平区南京路89号に位置している。この地点は1945年までイギリス租界の領界内であった。1927年創立。以後、長期にわたって高級官僚、買弁勢力の影響を強く受け、一時期、五四運動時に北京政府の交通総長を務めた曹汝霖、国民党党閥呉鼎昌らが理事会に入っていたこともある。劉賓雁の赴任当時も、学生は高級官僚、軍閥、商人の子弟が多く、また学校の教育内容も保守的、封建主義的色彩が濃かったという。「耀華学校」1頁。
劉賓雁の耀華中学での工作について、前掲の于建著『天津現代学生運動史』では、次のように記載されている。「1945年2月、「天津抗聯」総会主任の康力、分会主任兼編印室主任の劉子安(劉賓雁)が耀華学校で工作を展開した。康力は中4年クラスに入って学び、劉子安は学校の地理教員となった。彼らは学生を組織して進歩的な書籍を閲読する等の方法を通じて、一群の進歩的な中核を育て、ならびに抗戦勝利の直前に中5年クラスの学生金永清の入党にまで発展させた。」同書228頁。
- 9 「耀華学校」2～3頁。
訳文中の人名「劉子安」は劉賓雁のことであるが、ここでは原文に従った。徐邁翔・欽鴻編『中国現代文学史資料匯編(丙種)、中国現代文学作家筆名録』(湖南文芸出版社、1988年12月)170頁。同じく訳文中の「耀華学校」は耀華中学のことであるが、これも原文に従った。
- 10 「耀華学校」3頁。
- 11 「耀華学校」7～8頁。
- 12 「耀華学校」4～6頁。『天津簡史』403頁。
- 13 「耀華学校」6頁、「他的時代」66頁。
- 14 「耀華学校」19～20頁。
- 15 「耀華学校」9頁。